

氏名	宮崎 聡子	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第号 6212 号	
学位授与の日付	2020 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	日本語学習者による中止形接続の研究 —作文コーパスの調査を通じて—	
学位論文審査委員	教授 宮崎 和人	教授 栗林 裕
	准教授 中東 靖恵	准教授 堤 良一

学位論文内容の要旨

本研究は、日本語学習者が動詞・形容詞・述語名詞の中止形を接続表現として使用するときの特徴や傾向を明らかにすることを目的として、日本語学習者（大学生の中国語母語話者・韓国語母語話者で上級相当）と日本語母語話者の 1080 編の作文を収めた「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」（金澤編 2014）を対象とした包括的な調査を行い、その結果にもとづいて考察を行ったものである。

第 1 章では、序論として、目的を述べた後、本研究のテーマに関わる現代日本語学・日本語教育学の先行研究や教科書や指導書などをできる限り幅広く視野に収め、明らかにされていることや課題を整理した上で、本研究の位置づけや方法を示した。第 2 章～第 6 章が本論にあたる。

第 2・3 章では、動詞の中止形を扱った。まず、第 2 章では、叙述文における関係の意味と使用される形式（第 1 中止形（連用形）・第 2 中止形（テ形））の相関について考察した。「関係の意味」とは、先行句節が後続句節の表す事柄に対してどのような意味を担っているかということであるが、そのタイプについては、従来、恣意的・直観的に取り出されることが多かった。これに対して、本研究では、津留崎（2003）を参考にして、「時間的局在性」の観点から述語のタイプを「運動」「状態」「存在」「特性」「関係」「質」に分け、先行句節と後続句節の述語のタイプの組み合わせと主体の異・同によって、《並列》《前提》《先行事態》《原因》《注釈》《解説》《評価》《副状態》といった関係の意味を規定する方法を採用した。調査の結果、《先行事態》《先行原因》《副状態》が動詞述語に特徴的であるということが日本語母語話者と学習者に共通して観察された。また、検定の結果、学習者と日本語母語話者とで、関係的意味別の使用形式の分布に有意な差は見られないということが明らかになった。ただし、学習者の誤用を観察したところ、《先行事態》《原因》において述語の

タイプの組み合わせに問題があることがわかった。

第3章では、同じく動詞中止形を対象として、作文タスクと中止形の使用の相関について考察した。まず、確認すべきことは、第1中止形と第2中止形の比率が日本語母語話者と学習者とは大きな違いがあるということである。日本語話者の第1中止形の使用頻度の割合は中止形使用全体の半数を超えているのに対し、学習者の場合は2~3割程度にとどまる。次に、タスク別に形式の分布を調査した結果、読み手が疎遠（目上）であるか、親しい関係であるかという観点から形式の選択にとって重視される傾向が日本語母語話者に顕著であることがわかった。母語話者にもその傾向は見られるが、母語話者ほど顕著ではない。また、読み手が不特定な場合、特に、レポートや新聞投稿といった書き手が改まった態度で書くタスクでは、第1中止形を使用しようとする意識は学習者にも窺えるものの、日本語母語話者の積極的な使用に比べると大きな差があることがわかった。学習者のレベル差に注目すると、上位群になるほど第1中止形の使用率が高くなり、日本語母語話者の使用の特徴に近づくことも明らかになった。

第4章では、動詞の否定中止形、すなわち「シナイデ」「シナクテ」「セズ」「セズニ」「ナク中止形」について調査し、分析を行った。その結果、全体としては、日本語母語話者は「セズ」の使用率が突出して高く、学習者は「ナクテ」の使用率が高いことがわかった。上位群では母語話者同様に「セズ」の使用率が最も高くなっている一方、下位群における「セズ」の使用は1例にとどまり、「ナクテ」の使用が最も多くなっている。どのような関係的意味で使用しているかについて、日本語母語話者と学習者の使用率に大きな違いはなかったが、学習者には形式を混同した不自然な用例が観察された。タスク別の分析では、日本語母語話者は読み手が「不特定」の場合に「セズ」の使用が多いのに対して、学習者の場合にはそのような傾向は見られなかった。また、読み手が「特定」の場合は、母語話者と同様に、学習者においても親疎関係が形式の使い分けに影響していた。なお、規範的でないとされる「ナク中止形」については、日本語母語話者にも学習者にも使用が確認された。学習者については上位群にやや多かった。

第5・6章では、静的述語の中止形を扱った。第5章では、イ形容詞の中止形（「ク」「クテ」）の使用を見る。まず、「ク」の使用率は、日本語母語話者では高く、学習者では全体としては低いが、中・上位群は下位群に比べて有意に高い。次に、関係的意味別の使用状況については、日本語母語話者・学習者とも、多いものから「原因」「並列」「前提」の順になっていて全体的に違いは見られないが、形式の使い分けに関しては、「並列」「原因」の場合において、母語話者は「ク」が有意に多いのに対し、学習者は「クテ」が有意に多いという結果になった。タスク別の形式の使用状況については、日本語母語話者・学習者ともに、「ク」の使用は「特定・親」よりも「特定・疎」の方が有意に多いが、日本語母語話者のみ、「特定・疎」での「クテ」の使用が際立って少ない。「不特定」の場合は、母語話者の「ク」の使用が有意に多い。「頼まれ型」のタスクでは、学習者にはクテの使用が有意に多いという結果になった。なお、学習者の使用例には、初級で指導項目とはなっていない「前提」「注釈・解説・評価」といった形容詞述語に特徴的なものも観察された。

第6章では、ナ形容詞・述語名詞について調査し、前章で扱ったイ形容詞も含めて静的述語全体について考察した。まず、イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の使用頻度は、日本語母語話者・学習者

に関わらずイ形容詞が最も多く、ナ形容詞と述語名詞はほぼ同じ頻度で現れていた。関係的意味別の分析では、日本語母語話者については「原因」「並列」に次いでイ形容詞と述語名詞では「前提」の使用が、ナ形容詞では「注釈・解説・評価」の使用が多い。「並列」が母語話者より多いことを除けば、学習者も同じ傾向である。いずれの品詞についても、初級では文法項目として取り上げられてはいない「前提」や「注釈・解説・評価」の用例がある程度観察された。静的述語中止形の特徴ともいえるこれらの関係的意味での使用の割合は上位群になるほど高くなる傾向が見られる。タスク別の分析では、読み手との相関性が見られた。イ形容詞の「ク」「クテ」の使い分けは、日本語母語話者・学習者ともに「特定・疎」の場合の「ク」の使用が多くなるが、母語話者はそれが顕著である。また、名詞述語の「デ」「デアリ」については、母語話者では「不特定」のうちの「新聞への投稿文」というタスクにのみ使用されていたが、学習者は広範囲のタスクで使用しており、特に読み手が目上であるタスクでの使用が特徴的であった。

第7章では、まとめと今後の課題について述べた。全体として、上級日本語学習者の中止形接続の使用の傾向は、日本語母語話者と似ている部分が多い。関係的意味との関係では、日本語母語話者・日本語学習者に大きな違いが見られず、初級では指導項目となっていない「前提・注釈・解説」という静的述語の中止形に特徴的な用例も見られた。後者については、読解や作文などの学習を通じて習得されているのではないかと考えられる。ただし、親疎関係・媒体の別による第1中止形・第2中止形の使い分けについては、意識はされているものの、母語話者ほどには徹底されてはいないことがわかった。今後は、上級レベルに到達するまでの初級から中級レベルにおける段階的な中止形の使用状況と、学習者の母語の影響について、データを増やして研究を行う必要がある。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、日本語教育における文法指導の実践において重要性が指摘されている、中止形接続における中止形（第1中止形（連用形）・第2中止形（テ形））の選択要因に関する基礎的研究である。日本語の中止形接続に関する研究は数多いのだが、十分な量のデータにもとづく網羅的な調査研究はほとんどなく、また、中止形自体には意味はないと考える研究者も少なくないことから、関係的意味の記述は恣意的なものにとどまっていた。従来の研究でも、学習者は日本語母語話者に比べて連用形よりもテ形をよく使うということが指摘されているが、それ以上のことはほとんど明らかにされておらず、断片的な指摘に止まっている。本論文は、こうした状況を打開すべく、このテーマの研究に最適なコーパスを選び、網羅的な調査と分析を実行し、結果を定量的に記述することで、今後の研究が寄って立つべき礎を築こうとするものである。

本研究の調査対象として選ばれたのは、日本語学習者（大学生の中国語母語話者・韓国語母語話者で上級相当）と日本語母語話者の1080編の作文を収めた「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」（金澤編2014）である。ここから、テキスト処理によって、動詞・イ形容詞・ナ形容詞・名詞述語のすべての中止形を抽出し、その中から中止形接続の使用例を選別してデータベース

化している。このコーパスが最適である理由は、タスク別の作文コーパスであるということに尽きる。話し言葉では第2中止形を中心に使用するというルールがあり、問題は書き言葉である。このコーパスでは、自発型か頼まれ型か、読み手が特定か不特定か、疎遠か親しいかといった観点から、作文のタスクが類型化されており、中止形の選択にこれらのうちのどのファクターが中心に関わるかが分析できる。また、作文を書いたのは大学生であり、日本語能力は上級に相当するが、十全なレーティングによって上位群・中位群・下位群に分けられていることも有益である。

また、従来、恣意的・直観的に取り出されることが多かった関係的意味については、津留崎(2003)を参考にして、「時間的局在性」の観点から述語のタイプを「運動」「状態」「存在」「特性」「関係」「質」に分け、先行句節と後続句節の述語のタイプの組み合わせと主体の異・同によって、《並列》《前提》《先行事態》《原因》《注釈》《解説》《評価》《副状態》といった関係的意味を規定している。

以上のことを前提として、第2章以下の本論では、中止形接続に使用される中止形の選択が作文タスクの類型や関係的意味とどのように相関しているかについて、日本語母語話者と学習者の比較を行いながら考察している。第2・3章は動詞の中止形、第4章は動詞の否定中止形、第5章はイ形容詞の中止形、第6章はナ形容詞と名詞述語の中止形を扱っている。なお、第6章は、第5章の考察内容を合わせて、静的述語の全体像を見るという意味もある。第7章はまとめと今後の課題である。

結論としては、まず、学習者の第1中止形および「ク」の使用が母語話者のそれに比べて少ないということがいたるところで確認できた。従来指摘のあることではあるが、本研究によって実証されたといえる。また、関係的意味の分布など、学習者の中止形接続の使用の傾向は、日本語母語話者と似ている部分も少なくないということが明らかになった。初級では指導項目となっていない「前提・注釈・解説」という静的述語の中止形に特徴的な使用法が習得されている点も注目される。ただし、中・上位群と下位群とでは差がある。一方、タスク別の分析では、親疎というファクターの関与は、日本語母語話者ではかなり徹底されているのに対して、学習者でも関与は見られるものの、母語話者ほど徹底されていないことがわかった。そのほかにも詳細な事実が多数指摘されており、日本語母語話者と学習者とで中止形接続の使用傾向の違いがどの部分で発生しているのかという事実の総体を意味と言語活動の両面から初めて明らかにしたといえる。

以下、審査会による本論文に対する総評を述べる。本論文は、明確な観点を持ち、従来にない規模と精度の調査により、上級日本語学習者の書き言葉における中止形接続の使用実態を様々な角度から明らかにしている点で高く評価できる。選定したコーパスも適切であり、その特性をよく理解し、最大限に活用している。動詞だけでなく、述語になる単語を広く扱っている点、関係的意味を時間的局所限定にもとづいて厳密に規定している点もよい。また、調査結果を多数の表やグラフによって分かりやすく示し、分析にあたっては、随所で有意性に関する検定を行っている。その手法も基本的に妥当である。本論文によって、日本語母語話者と学習者の中止形接続の使用傾向の違いに関する従来の指摘に客観的な裏づけが与えられるとともに、多数の新たな事実が明らかになった。これによって、従来の指導法の検証や今後の指導法の開発が進むことが期待できる。

審査委員からは次のような意見もあった。先行研究に関する記述は、広範囲の文献を手際よくま

とめていて、読者にとって利用価値が高い。ただし、批判的検討が足りない。最近、学習者コーパスが量産されているが、コーパスを1つに絞ったことは、この論文に均質性と一貫性を与えており、デメリットにはならない。関係的意味をめぐる日本語母語話者と学習者の中止形接続の使用傾向の違いについては、さらに追求する余地がある。中止形接続はOV言語に共通する課題である。外国語の研究からも学んでほしい。母語干渉の可能性も視野に入れる必要がある。章によっては誤植が多い。

いくつか問題点も指摘されたが、致命的な欠点はなく、審査委員会では全員一致で本論文は学位授与に十分に値するという結論に達した。